

触りようなない思い出話は講話になっっているのでしょうか。

一人で遊んでいるのは嘘なのでしょうか。

一人佇んで、涙を流す。

美しい世界はそこにはあった。

私は何を言っているのだろうかと気付く。

いずれも私に向けて話してくれたことはいつものように楽しませてもらってる。
何も出来ないのいつものこと、でも。

「どうしてそんなことを言うの？」

「簡単じゃないか。君のことを愛しているんだよ」

こんなよくわからない思い出話を思い出すことすらも今では何もできない。

一緒に考えて、一緒に空を見上げて、一緒にいつまでも考えているのだから。

だから、いつものようにあなたのそばにしていることを。

ずっと考えていたのです。

だから、あなたに話しているこのことを。

あなたは どう思いますか？

講話はいつも思い出の中に混じっている。

そしてその思い出の中に人が話していることに気付く。

その人が本当に講話を話していることに気付く。
でも、その講話は今聞いたばかり。だから。
ずっと話を聞いていたい。
そう思った。